

天文用語に關する私見 (7)

(特に野尻氏の文に答へて——iii)

山 本 一 清

星の名のためのギリシヤ文字について(再説)

西暦1603年のパイエル著の Uranometria 中に用ゐられた各星座の星々の符號をギリシヤ文字に當てはめて、 $\alpha \beta \gamma \delta \dots$ 等と呼ぶことは、今一般の天文學界に用ゐられてゐる。従つて之れを成るべく歪めずに我が邦語譯の星にも取り入れるといふことは、一應、誰でも考へる所で、まことに尤もな話である。

ところが、自分は、此の問題について、十五年前に天文同好會を創立した最初から特別な考慮を拂つてゐるものである。そもそもギリシヤ文字といふものは歐米人にとつては傳統的にも古典的にも或る種の親しみのあるものであるけれど、吾々東洋人に取つては全くのエトランジェであるのが普通である、文字の形も、發音も其の順番も、皆、今の吾々には、天文學を修める時以外には不必要なものである。尤も、數學を習つたり、其の他、或る特別な方面には、ギリシヤ文字の或る選ばれたる少數のものに親しむ機會は吾人にもある。例へば、 $\alpha \beta \gamma$ 等の如き、 $\lambda \mu \nu$ の如き、 $\xi \eta \zeta$ の如き、しかし此等は甚

ギリシヤ字 發 音 略して			
A	α	アルファ	ア
B	β	ベータ	ベ
Γ	γ	ガンマ	ガ
Δ	δ	デルタ	デ
E	ϵ	エプシロン	エプ
Z	ζ	ゼータ	ゼ
Π	η	エータ	エ
Θ	θ	テータ	テ
I	ι	イオタ	イ
K	κ	カパ	カ
Λ	λ	ラムダ	ラ
M	μ	ム	ム
N	ν	ヌ	ヌ
Ξ	ξ	クシ	クシ
O	$\omicron$	オミクロン	オミ
Π	π	パイ	ピ
P	ρ	ロー	ロ
Σ	σ	シグマ	シ
T	τ	タウ	タ
Υ	υ	ウプシロン	ウ
Φ	ϕ	ファイ	ヒ
X	χ	ハイ	ヒ
Ψ	ψ	プシ	プシ
Ω	ω	オメガ	オ

だ斷片的に覺えるに止まり、決して α から ω からを全部知得する必要はな

いのであるし、尙ほ其の文字の順序などを覚えることは全く要らないのである。ところが本格的な天文學に於いては、ギリシヤ文字を、其の形と發音と順番とについて完全に知ることを要求されるのであるが、之れは一般の東洋人にとつては實に重大なる負擔であつて、天文學の趣味を楽しもうとする純なアマチュアたちに負はせるべく餘りに氣の毒な荷物と言はねばならない。何とかして此の重荷を一般人士が負はずに済むか、又は少なくとも荷の重さを軽くする工夫をしなければならない。

それに、今一つ考ふべきことは、バイエルを初め歐米人たちが、“字列としてのギリシヤ文字”を如何なる心持ちで昔も今も使用するかと言ふ點である。既に識者の知つてゐる如く、ギリシヤの古代以來、彼國やローマには數字といふものが無かつたのであつて、従つてアラビア數字のやうなものが近世には數學界にひろく用ゐられるやうになつたのであるが、其れまでは、世間ではギリシヤ文字を其のまゝ數字の代用にも用ゐ、例へば

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 200 300 400 500 600 700 800 の代りに

$\alpha \beta \gamma \delta \epsilon \zeta \eta \theta : \kappa \lambda \mu \nu \xi \omicron \pi \rho \sigma \tau \upsilon \phi \chi \psi \omega$ を用ゐた

のである。従つて、バイエルが三百年前、星の各々に $\alpha \beta \gamma \dots$ の文字を附したのも、決して之れは各星に“アルファ、ベータ、ガンマ”等といふ呼び名を與へる積りではなかつたのであつて、單に 1番 2番 3番……と言つたやうな番號を與へるつもりで、只、古來用ゐてゐたギリシヤ文字を符號 (Designation) として附したのである。くり返して言ふが、決して之れは星の名 (Name) ではないのである。Sirius とか、Aldebaran とか、牽牛とか織女とかこそ本統に、星の名と言ふべきものであるのだが、 $\alpha \beta \gamma \dots$ 等は星の符號に過ぎない。

かういふ風に考へて見ると、吾々日本人が西洋天文學の譯文中に $\alpha \beta \gamma \dots$ を如何に取り扱はうかについては、可なり自由な心持ちで、其の本來の目的に添ふやうに考へなければならない。上述した如く、 $\alpha \beta \gamma \dots$ は星の符號であるのだから、最も簡単に、囚はれない態度よりすれば、 $\alpha \beta \gamma \dots$ 代りにイロハ……でも、又はアイウエオ……でも好いわけなのである。現に此うしたイロハ……の流儀を實行してゐる人さへある。

しかし、自分は思ふに、吾々は此の $\alpha\beta\gamma$の問題の場合には、何と言つても、やはり或る種の譯文とか譯語とかを考へる態度でなければならぬ。何となれば、各星座の星に符號を附けるといふことはバイエルに初まるのであつて、其の形式を今吾々は日本語として模倣しやうとするのであるから、譯語の問題に違ひないわけである。して見ると、いつかも述べた通り、およそ譯語譯文の哲學から言つて、其の最上乘なるものは、識者が見た場合に、譯語から直ちに其の原語を想起することの容易なものであるべきである。此の見地から考へると、 $\alpha\beta\gamma$の代りに、イロハ.....や、アイウエオ.....を使ふよりも、むしろ

ア ベ ガ デ エブ ゼ エ |

といふ略字を採用するのが好い、此の流儀の良い點は

- 1) 發音が簡單で、初めての人にも覚え易く、眞に“符號”としての目的に添ふものであること。
- 2) 識者には直ちに原語 $\alpha\beta\gamma\delta$を聯想々起させること。
- 3) 初めアベガデ.....のみを學んだ者が後日に $\alpha\beta\gamma\delta$の原語を直接に學ぶ場合に極めて容易で、勞苦を新たにする必要なきこと。

等々、實用的にも教育的にも之れが頗る利便多いものであること明らかである。

天文を楽しまんとして不必要な勞苦を増すことのないやうに工夫して置くことは、ギリシヤ文字の場合のみに限らず、他の多くの場合にも、吾人は平生から大衆教育の見地から考へて置くべき責任を感じるものである。

之れと同じやうな問題として、自分は今一つ平常から考へ、且つ考へてゐることはローマ數字の場合である。——ローマ數字といふものは、吾々東洋人には、やはり、昔しから殆んど親しみの無いものであるが、只、ローマ法の制令が出て以來、數百年前から、西洋式の時計の文字盤の上にのみ多少のなじみを感じてゐるものである。それも I から XII までのものに限られてゐたのは衆知のことである。しかるに、最近年間の世界の動きといふものは面白いもので、西洋でさへ此のローマ數字を讀むのをおつくうに思ふやうになつたらしく、此頃作られる大小の時計文字盤は殆んど全部が 1 から 12 までアラビア數字が書かれることになつて了つた。之れが、理屈を超越した世の實

際の動向といふものであらう。こうした時代に、何の理由によつて、世に逆行した態度で、吾々がローマ數字を敢て使ふのであるか!? 自分は此うした時代には吾々は世に率先してローマ數字の如き時代おくれのものを成るべく用ゐないやうに心得るべきであると思ひ、之れの徹底を期してゐる。

尤も、自分は一面に於いてやはり古典的文化をなつかしむ心から、世界が永く使ひ古して來た時計面のローマ數字には一種の親しみを感じるものであつて、上述の如き時世の動きとは言へ、近年の時計面がアラビア數字を用ゐるやうになつたのを、現代の無智者が古典を蹂躪したやうに感じて、今も尚ほ憤激を禁じ得ない。時計面の文字は實は決して讀むためのものではなく、只其の位置を示すに止まるだけであるから、どんな符號だつて、構はないのであるし、又、時計面の文字は I から XII までに限極せられ、決して其れ以上に及ばない。たとひ之れを星圖の面に擴張して I から XXIV まで書き并べたとしても實に少數の限られた範圍に過ぎないから、之れだけならば敢へて差支へないと思ふ。しかしながら、ローマ數字を百や千や萬等の場合にも用ゐることを敢へてし、むやみに CLXXV だの、MMCCCXVIII だの言つたやうな數字を文章の中に混じることは自分としては好まない。同時に、年月日を書く場合に、1935 XI 28 等と書くことも自分は好まない。年月日の場合に、月は數で數へるものでなく、只それが何々といふ「名」の月であるといふ風に解すべきだと思ふものだから。自分は多くの場合は 1935 年十月 28 日 といふ風に書く。即ち、年數と日數とは數へた數字であり、月は數字でなくて、名であるといふのが自分の立前であるのである。

讀者よ、論が甚だデリケートで、筆に書き盡し難い點が多い、何卒、意のある所を判讀して貰ひたい。しかし批評は、喜んで受ける。(つづく)

今年の秋こそ天文書を讀ませう。——

山本博士著「標準天文學」は協會事務所へ御申込み下さい。